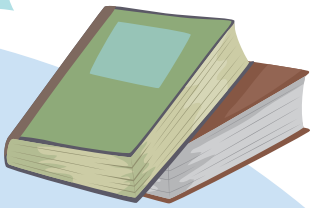
東京大学 The Center for Early Childhood Development, Education, and Policy Research × ポプラ社 共同研究

「子どもと絵本・本に関する研究」プロジェクト

調査結果ダイジェスト

令和の子どもと絵本・本環境

子どもの読書環境と公立図書館の役割に関する調査

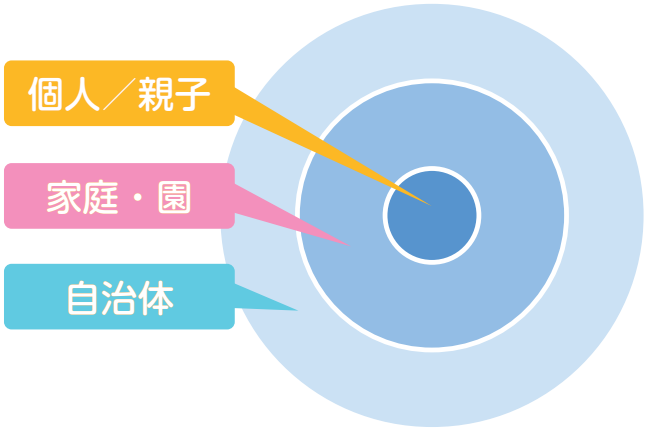


保育・幼児教育施設における絵本環境実態調査

幼児の読書とデジタルメディア利用についての保護者調査

このリーフレットについて

- Cedep×ポプラ社の共同研究では、子どもの絵本・本環境を子ども・家庭-園-地域/自治体というエコシステムとして捉えた上で、それぞれの実態を把握するための調査を実施してきました。
- このリーフレットでは、各調査を通じて明らになった事柄のうち、特に重要だと思われるものをまとめました。



➡調査１：　幼児の読書とデジタルメディア利用についての保護者調査

➡調査２：　保育・幼児教育施設における絵本環境実態調査

➡調査３：　子どもの読書環境と公立図書館の役割に関する調査

3つの調査から見えてきたこと

家庭や園の絵本・本環境、読書環境には格差があり、絵本・本を借りることのできる図書館などの地域/自治体の施設はそれらを保障する役割を果たしている。

地域の視点も含めて、絵本・本環境を豊かにしていくための取り組みを多角的に取り組む必要がある。

- 調査１では、読書が子どものリテラシーや非認知能力を高める可能性が示唆された一方で、読書時間と比べてスクリーンタイムがとても長いことがわかりました。
- 家庭による絵本・本環境格差も大きく、これは家庭での読書活動の推進と並行して、家庭外（園や地域）での読書活動の推進もまた非常に重要であると考えられます。
- しかし調査２では、子どもが日々比較的長時間過ごす保育・幼児教育施設でも絵本・本環境に施設による違いがあることもわかりました。
- 調査３では、地域の公立図書館が家庭や園の絵本・本環境を支え、それぞれの読書活動の推進に多面的に貢献していることが改めて明らかになりました。

各調査の結果の要点

幼児の読書とデジタルメディア利用についての保護者調査

【調査１】➡ P５

- 幼児の家庭での読書時間は短く、スクリーンタイムは長い
- 読書時間の長さはリテラシーと非認知能力の高さと関連している一方、学習時間はリテラシーのみ、創作・表現遊びの時間、運動・活動的遊びの時間は非認知能力のみと関連している
- スクリーンタイムの長さはリテラシーの低さと関連している
- 新型コロナウイルス感染症の流行とそれに伴う緊急事態宣言等の措置の影響により、スクリーンタイムは相当程度増加していた
- 保護者の精神的健康状態は、2020年５月から2021年７月にかけて継続して深刻な状態にある

保育・幼児教育施設における絵本環境実態調査

【調査２】➡ P９

- 施設形態によって蔵書数・予算に差がある
- 同一施設形態内でも、施設による蔵書数・予算に大きな違いがある（絵本・本格差）
- 保育・幼児教育施設は、小学校・中学校に比べて子ども一人あたりの蔵書数・予算が少ない
- 蔵書数が2000冊を超えると、約半数の園が蔵書数が「十分にある」と回答していた
- 蔵書数や絵本・本を購入するための予算が少ない園は、絵本を借りることのできる近隣施設（主として図書館）を活用している
- 園での絵本・本購入にあたって保護者の費用負担がある園は三分の一程度
- 自治体に絵本・本を購入するための補助金制度があると回答した園は１割～２割。幼稚園でやや多い

子どもの読書環境と公立図書館の役割に関する調査

【調査３】➡ P13

- 半数以上の公立図書館・図書室は「乳幼児と保護者のためのスペース」を設けていた
- 乳幼児とその保護者が利用しやすい設備やサービスが多くの図書館で導入されていた
- 乳幼児とその保護者のための蔵書・物品、サービスの導入も進んでいるが、外国語対応やバリアフリー対応には課題もみられた
- 多くの図書館で、乳幼児とその保護者のための優先区画・スペースに様々な工夫が加えられていた
- 子どもの読書活動の推進に向けた取り組みのうち最も導入率が高かったのは乳幼児の図書カード作成、次いでお話会・読み聞かせ会であった
- 公立図書館・図書室は子どもに関わる多様な施設と連携を行っていた

絵本・本環境の空間的・時間的構造

エコシステム

子どもの絵本・本環境における空間的構造

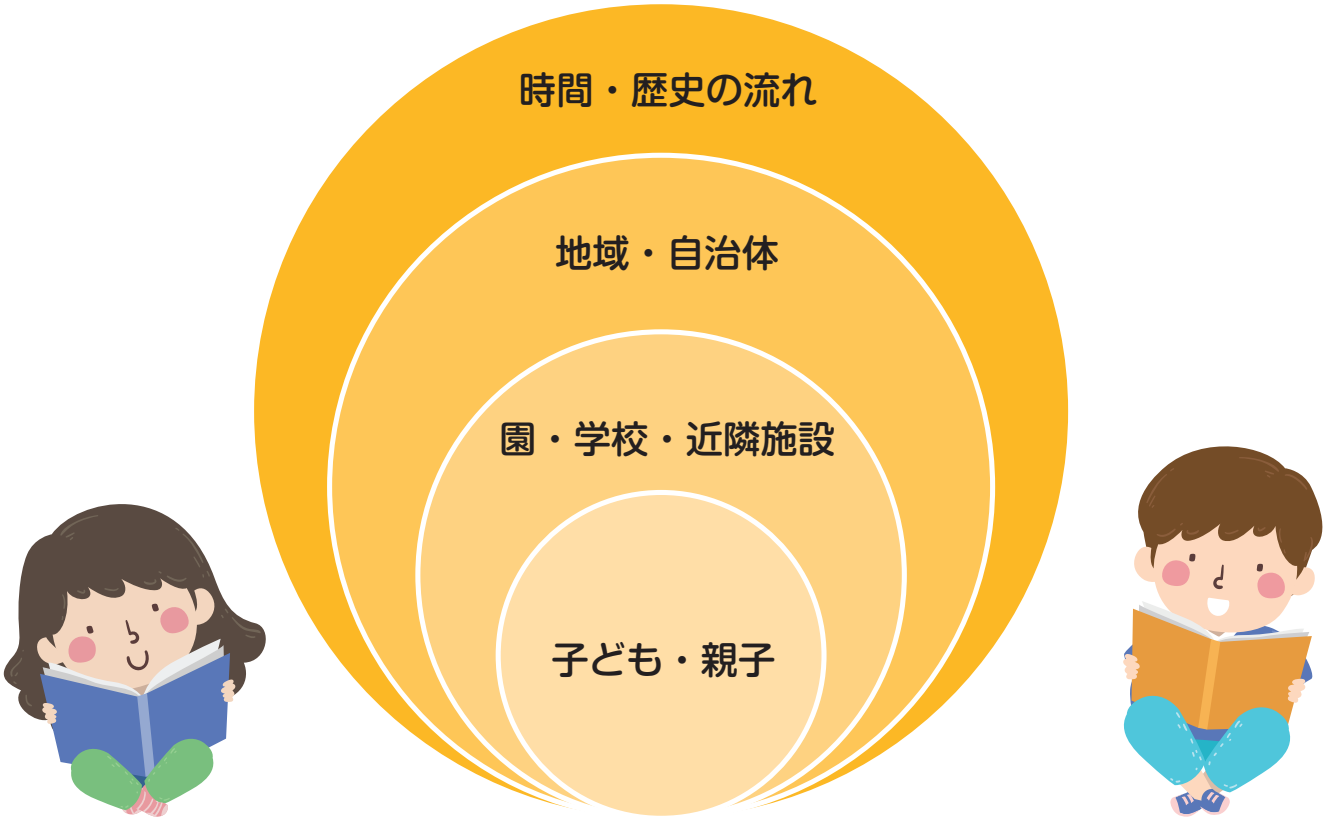
- 子ども（親子）を中心として、その周辺に家庭・園・学校、地域の図書館や本を借りたり読書活動の推進に向けた様々な取り組みを行っている地元団体などがあり、それらが相互に影響し合いしながら子どもの絵本・本環境を構成していると考えられます。
- 本プロジェクトでは、子どもの絵本・本環境をエコシステムとして包括的・階層的に捉え、各レイヤーの実態とレイヤー間の相互関連性を明らかにすることを通じて、子どもの絵本・本環境を豊かにしていくために必要な取り組みやそのための制度・政策を提言していきたいと考えています。

3 種類の調査との対応関係

幼児の読書とデジタルメディア利用についての保護者調査
➡ 子ども・親子のレイヤー

保育・幼児教育施設における絵本環境実態調査
➡ 園・学校・近隣施設のレイヤー

公立図書館調査
➡ 園・学校・近隣施設／地域・自治体のレイヤー



調 査 概 要

幼児の読書とデジタルメディア利用についての保護者調査

- 調査時期　2021年７月
- 調査方法　Web調査
- 調査対象　全国の未就学児（年少～年長クラス）の母親
- 調査テーマ　幼児の家庭における読書環境、読書習慣、デジタルメディア利用状況と利用ルール、生活リズム、保護者の読書、遊び、デジタルメディアに対する意識、保護者のメンタルヘルス

Q① 家庭にある「お子様の絵本・本」の冊数は？
Q② 家庭で週に何日お子様と大人が一緒に絵本や本を読んでいますか？
Q③ お子様は平均して一日何分程度、絵本や本を読んでいますか？
Q④ お子様が絵本や本を読む際、紙と電子書籍のどちらが好ましいと思いますか？
Q⑤ お子様が絵本や本を読む時間のうち、電子書籍を読む時間の割合は？など

保育・幼児教育施設における絵本環境実態調査

- 調査時期　2019年10月
- 調査方法　ポプラ社ダイレクトメールに調査票を同封してFAXまたはウェブ上で回答を依頼
- 調査対象　全国の保育・幼児教育施設（回答数1,042施設）
- 調査テーマ　保育・幼児教育施設における絵本・本環境（蔵書数、年間購入予算、購入するタイミングや選び手）

Q① 保育・幼児教育施設の蔵書数は？小・中学校と比べると？
Q② 保育・幼児教育施設の1年あたりの絵本・本の購入予算は？小・中学校と比べると？
Q③ 先生たちは蔵書数や予算を十分と捉えている？
Q④ 蔵書数や予算が多い園の特徴は？
Q⑤ 園の絵本・本を購入するための保護者の費用負担や自治体の補助金に関する実態は？など

子どもの読書環境と公立図書館の役割に関する調査

- 調査時期　2020年10月～12月
- 調査方法　質問紙調査
- 調査対象　全国の公立図書館（回答数1,304施設）
- 調査テーマ　子どもの利用環境、子どもの読書活動の推進に向けた取り組み、他機関連携、コロナ禍における図書館の対応等

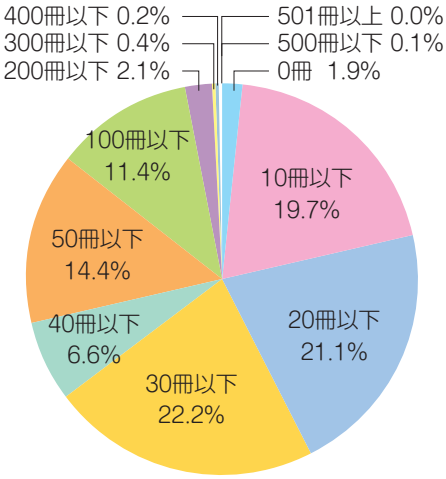
Q① 子ども向けのある図書館の割合と内訳は？
Q② 乳幼児向けのスペースはどのような環境になっている？
Q③ 乳幼児とその保護者が利用しやすい環境はどのくらい整備されている？
Q④ 普通の絵本・本以外に、乳幼児とその保護者が利用できる資料はどのくらい揃っている？
Q⑤ 図書館は地域の学校や子どもに関する施設とどのくらい連携している？など

1 幼児の読書とデジタルメディア利用についての保護者調査

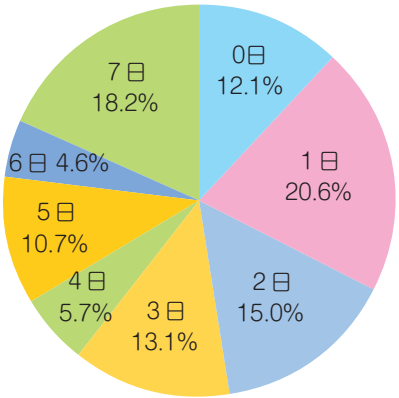
（1）家庭での読書習慣、保護者の読書に対する意識

過半数の幼児は、一日の読書時間が平均10分以下。電子書籍を利用している幼児は1割未満で、保護者の「子どもが読む絵本・本は紙が良い」という意識が根強い。

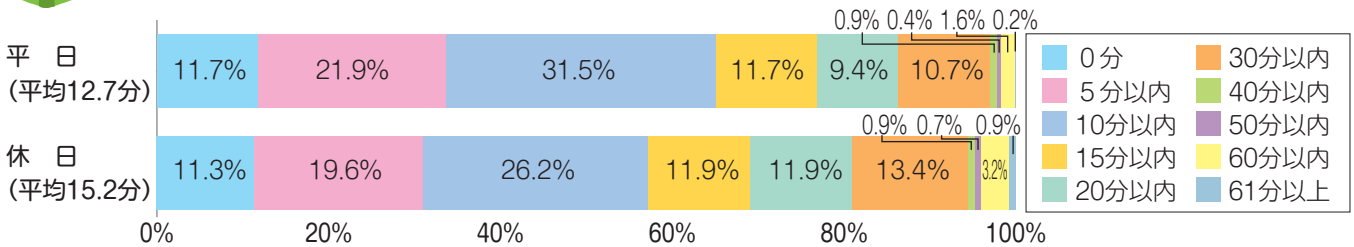
Q1 家庭にある「お子様の絵本・本」の冊数は？



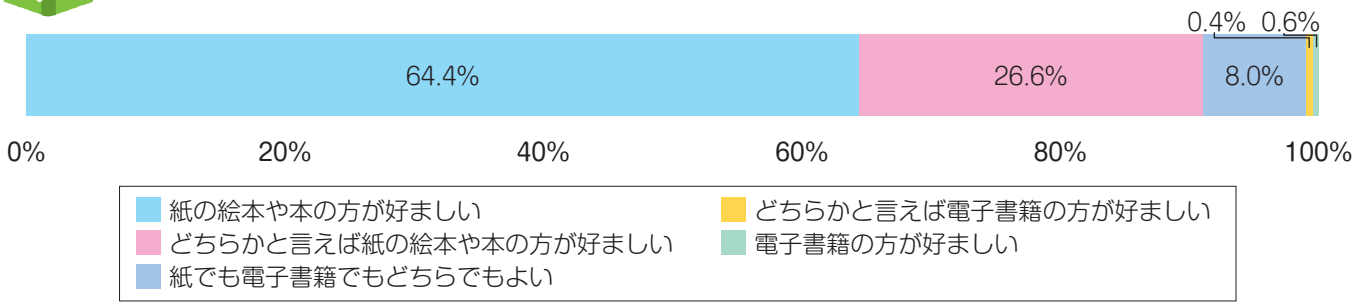
Q2 家庭で週に何日お子様と大人が一緒に絵本や本を読んでいますか？（電子書籍含む）



Q3 お子様は平均して一日何分程度、絵本や本を読んでいますか？（電子書籍含む）



Q4 お子様が絵本や本を読む際、紙と電子書籍のどちらが好ましいと思いますか？



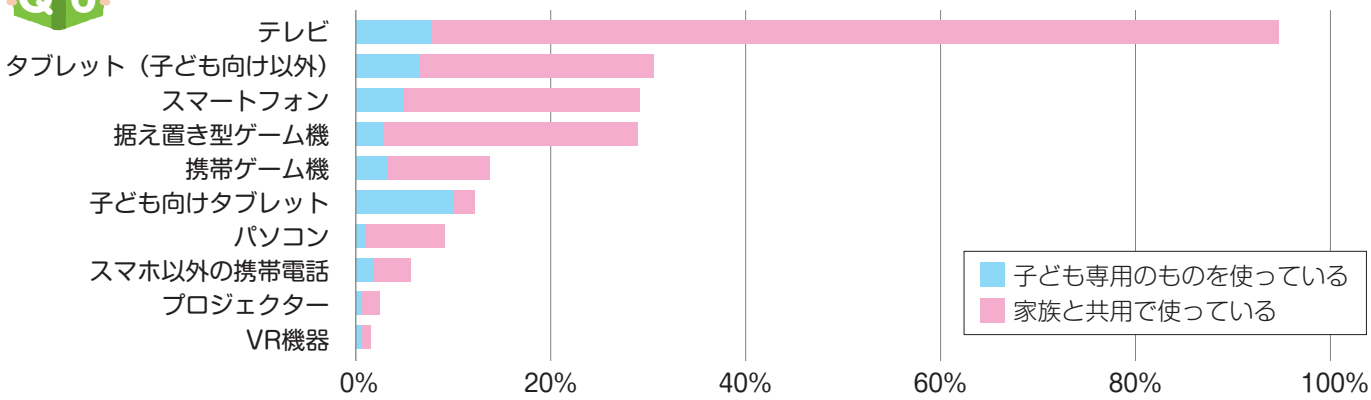
Q5 お子様が絵本や本を読む時間のうち、電子書籍を読む時間の割合は？

➡ 92.9%が「0」と回答

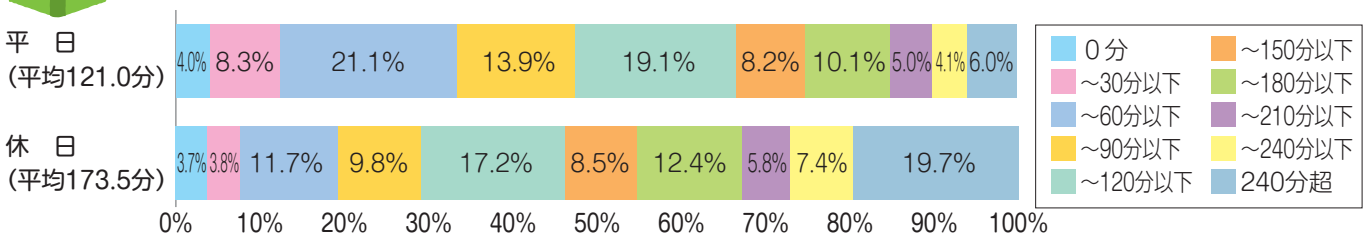
(2) 家庭でのデジタルメディア利用と利用ルール

9割以上の幼児が日常的にテレビを視聴。テレビ以外のデジタルデバイス利用も広がりつつある。スクリーンタイムは平日でも平均2時間程度と長い。保護者による視聴コンテンツのチェック、フィルタリングはあまり普及していない。

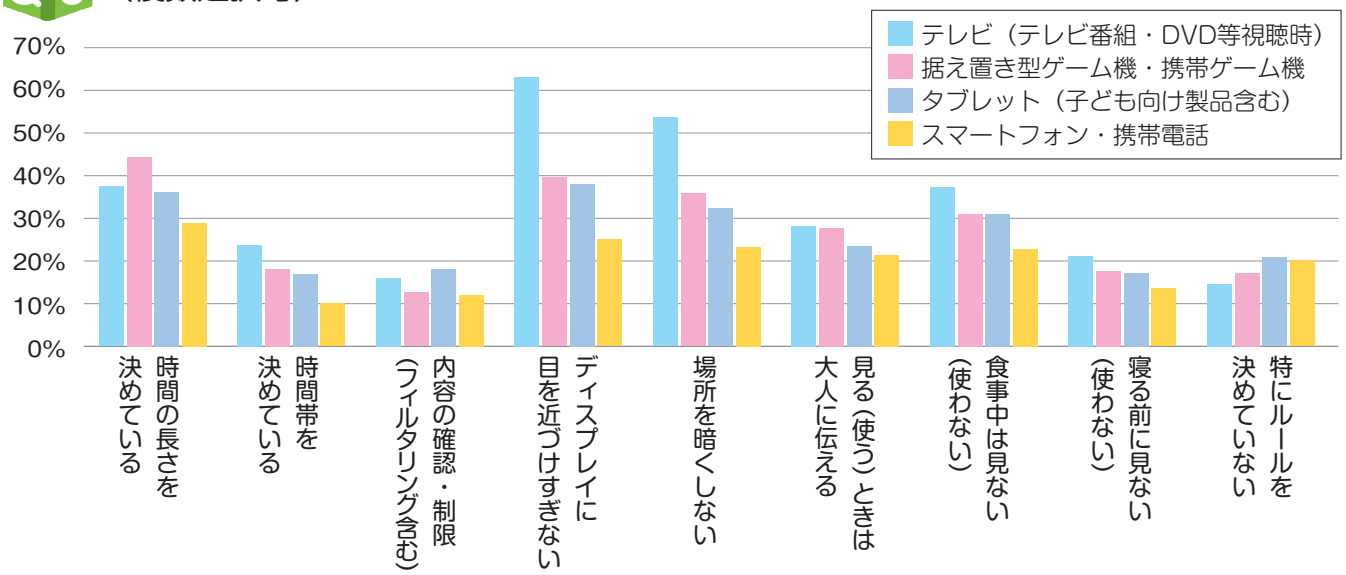
Q6 家庭でのお子様のデジタルデバイス使用状況は？



Q7 お子様がスクリーンを視聴している時間は平均してどの程度？（各デバイスの視聴時間の合計）



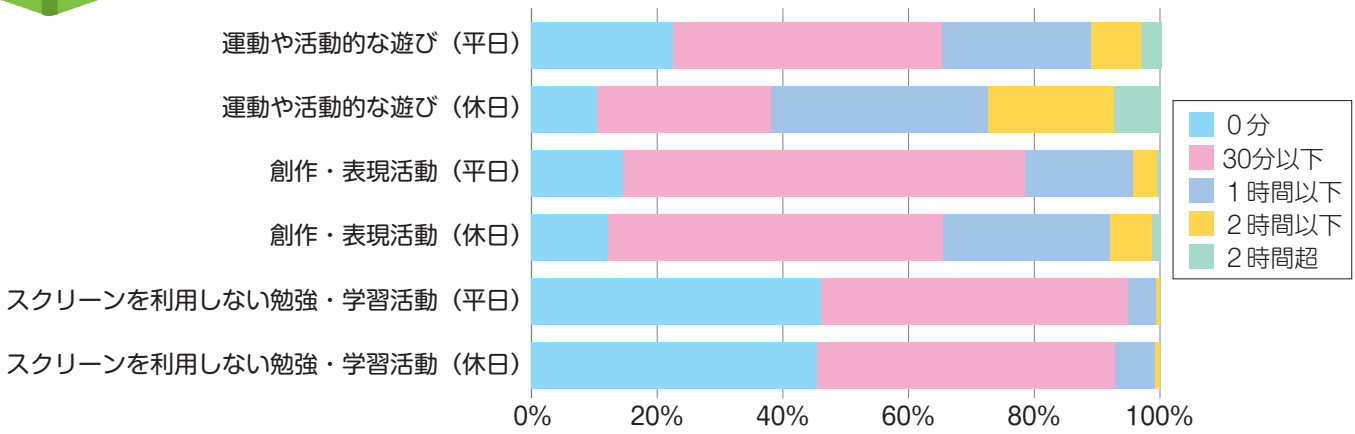
Q8 家庭でお子様がデジタルデバイスを使用するときに決めているルールは？（複数選択可）

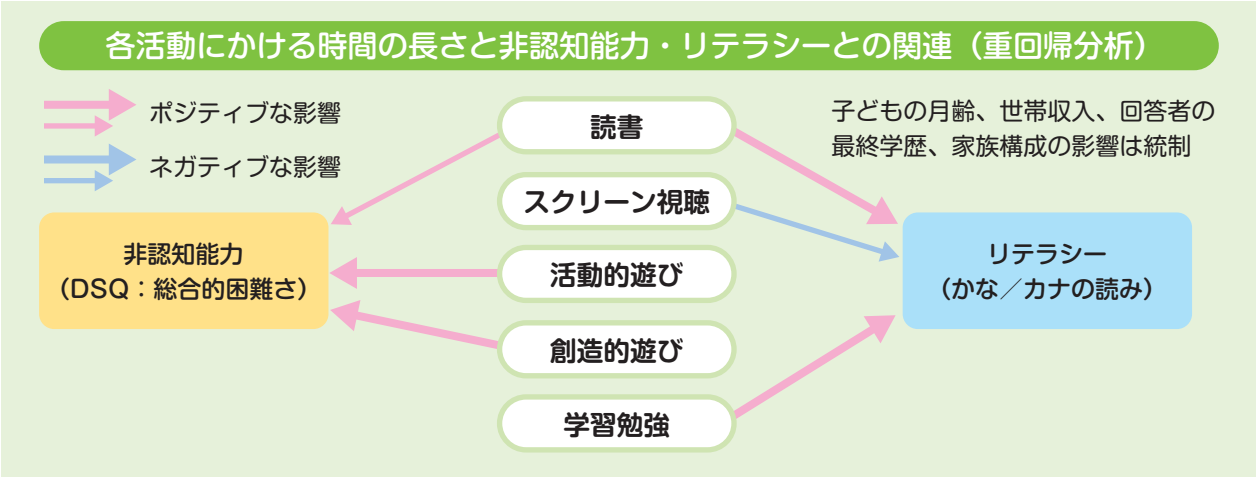


(3) その他の活動、認知 / 非認知能力との関連、まとめ

読書や勉強・学習よりも、活動的遊び、創造的遊びに時間を割いている幼児が多い。各種活動時間の中で、読書時間の長さのみが、リテラシーと非認知能力の双方にポジティブな影響を及ぼしている可能性がある。

読書・スクリーン視聴以外の活動時間は平均してどれくらい？





多くの幼児は、家庭で長時間スクリーンを見ながら過ごしています。テレビは今でも幼児にとって最も身近なデジタルデバイスですが、タブレットやスマートフォンなどを利用する幼児も増えつつあるようです。誰もが様々なデジタルデバイスから多様なコンテンツを視聴できるようになってきています。今後は子どものスクリーンタイムの長さに一喜一憂するのではなく、子どもが接触するコンテンツの中身や視聴方法についての議論を深める必要があるかもしれません。

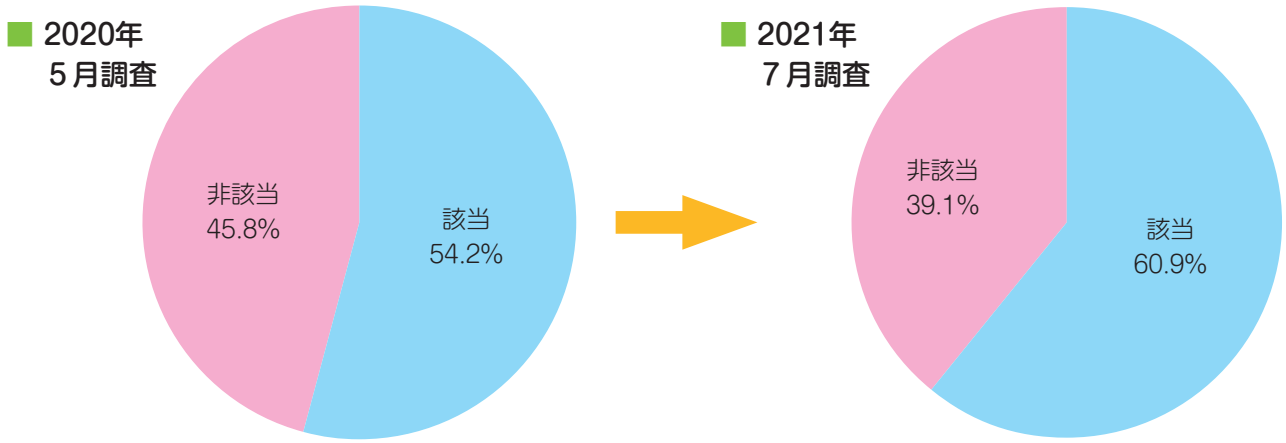
スクリーンを見ている時間と比べると、幼児が家庭で絵本や本に接する時間はわずかです。テレビを視聴するのとは異なり、幼児が絵本・本と触れ合うには、親子で絵を楽しんだり年長者が文字を声に出し子どもに向けて語ることが必要になります。子どもの認知/非認知能力の発達にとって、読書は大きな意味を持つものと考えられます。子どもの「読む機会」をいかに保証していくのかという問題は、日々時間に追われている養育者だけが取り組んでいく課題ではなく、保育・幼児教育施設や図書館の役割などを含むマクロな視点から社会全体で考える課題であると言えるでしょう。

（4）新型コロナウイルス感染症と保護者のストレス

緊急事態宣言下で多くの保育・幼児教育施設が閉まっていた2020年５月と比較して、2021年７月時点での保護者の精神的健康状態は悪化している。強いストレスはスクリーンタイムの増大や読書時間の短縮と関連している可能性がある。

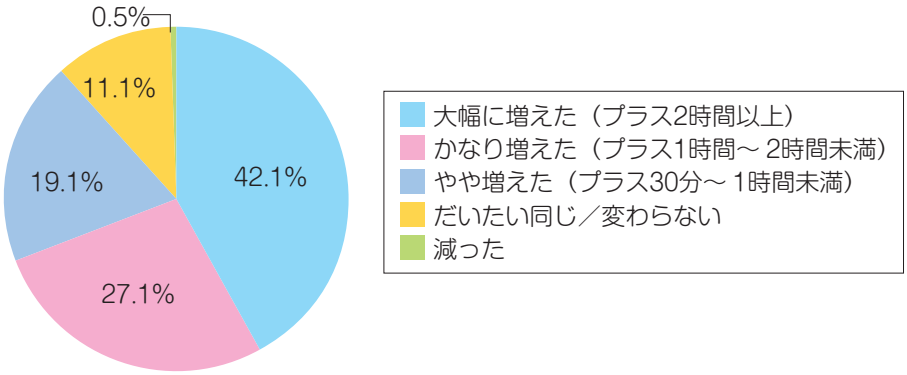
精神的健康状態が良好でない回答者※の割合

※ WHO-5の合計得点が13点未満などの基準を満たす者



※ ３～６歳児の保護者のデータを抜粋

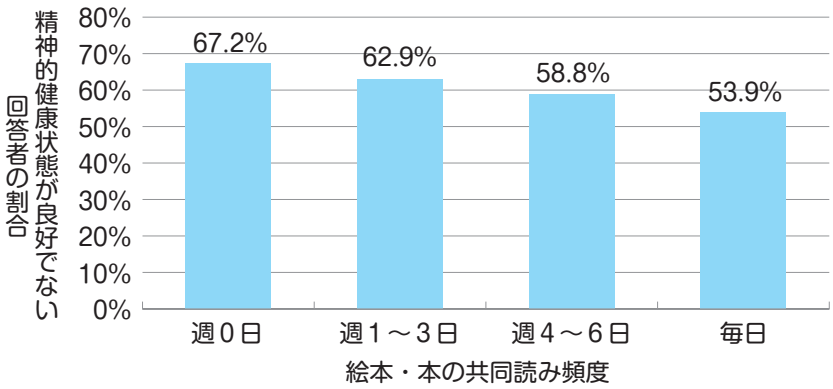
2020年５月調査：コロナ流行前と比較したスクリーンタイムの変化



保育施設の閉園、外遊びの自粛などが原因と考えられます

2021年７月調査：読み聞かせの頻度と母親の精神的健康状態の関連

読み聞かせには、ある程度の精神的なゆとりが必要なのかもしれません

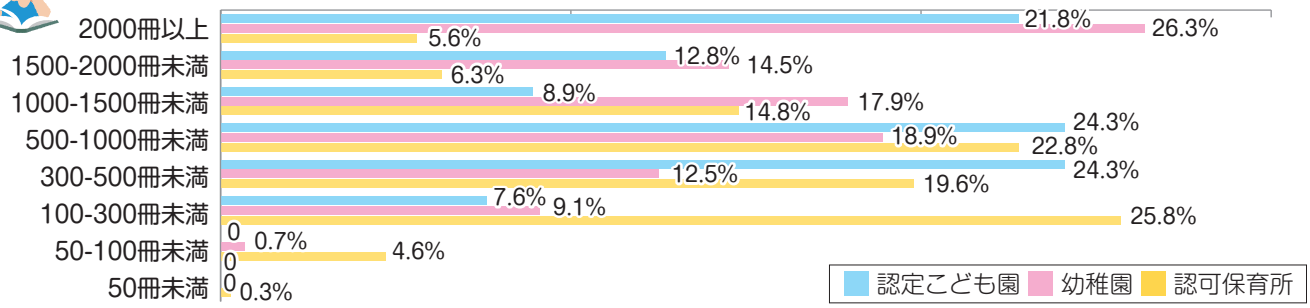


2 保育・幼児教育施設における絵本環境実態調査

(1) 園の蔵書数と年間予算：小・中学校との比較も含めて

認可保育所の蔵書数は幼稚園や認定こども園に比べて少ない傾向にある。ただし、同じ施設形態でも園による蔵書数のバラつきが大きい。
認可保育所と幼稚園では、年間の絵本・本購入予算が５万円未満である園が５割以上。
小・中学校と比べて子ども一人あたりの蔵書数や予算が少ない傾向にある。

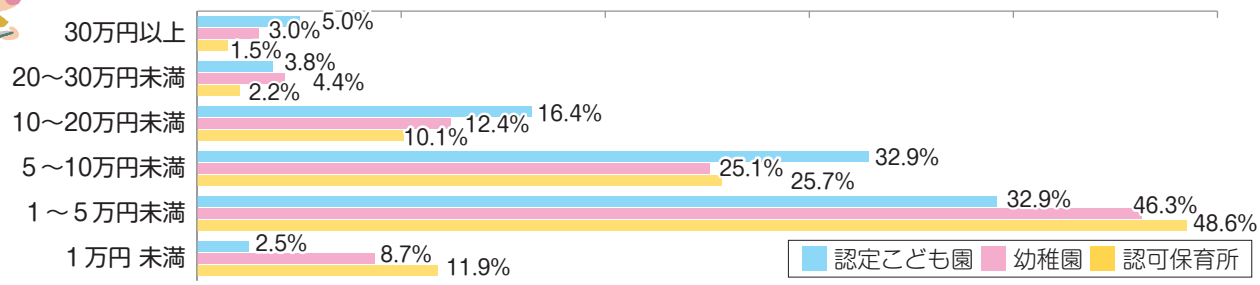
絵本の蔵書数の割合　施設形態別



各施設の蔵書数・子ども一人あたりの蔵書数の概算値

施設形態	(a) 施設あたり平均人数（名）	施設あたり蔵書数（冊）		子ども一人あたりの蔵書数（冊）					
		(b) 平均値	SD	(c) 参考値 (b/a)	平均値（算術）	SD	四分位（25%）	四分位（50%）	四分位（75%）
認可保育所	93.1	742.8	726.8	8.0	10.8	18.1	2.6	6.3	12.0
幼稚園	112.7	1518.6	1359.0	13.5	21.9	25.1	5.9	15.0	30.5
認定こども園	132.6	1363.3	1481.5	10.3	12.8	18.2	3.6	7.3	14.6
その他施設	45.5	237.1	376.2	5.2	6.6	6.3	2.5	5.2	7.9
小学校	322.7	10,335	—	32.0	—	—	—	—	—
中学校	314.8	11,579	—	36.8	—	—	—	—	—

年間の絵本予算の割合　施設形態別



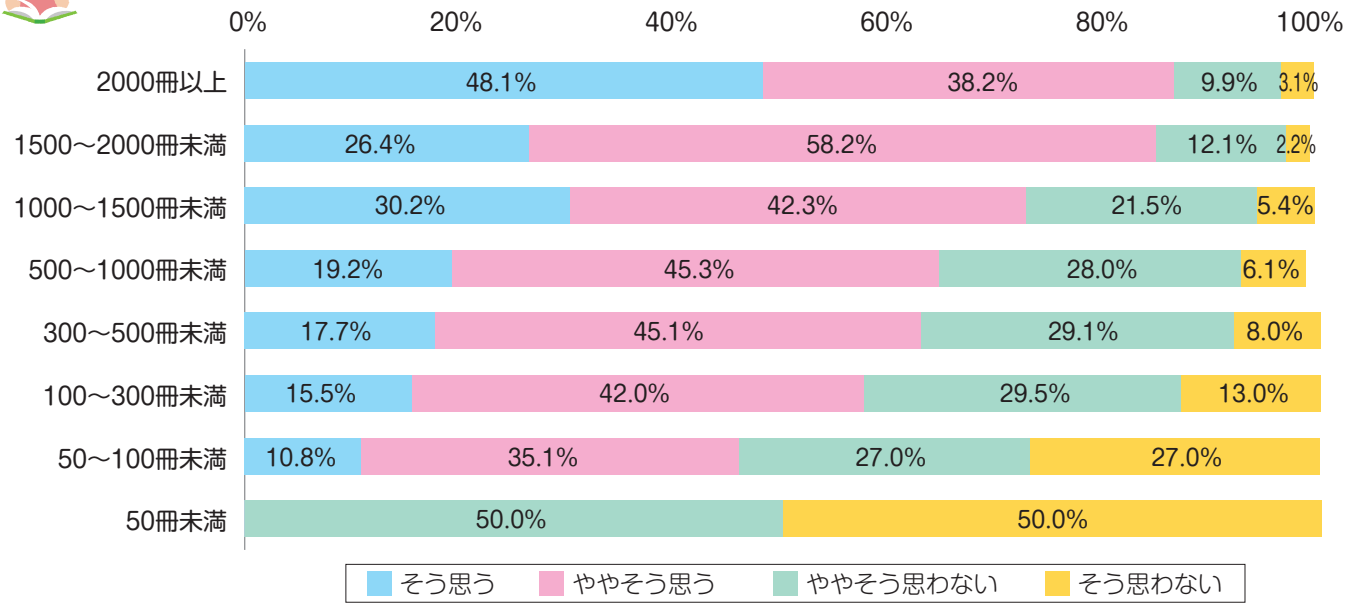
各施設形態の年間予算・子ども一人あたりの年間予算の概算値

施設形態	(a) 施設あたり平均人数（名）	年間予算額（円）		子ども一人あたりの予算額（円）					
		(b) 平均値	SD	(c) 参考値 (b/a)	平均値（算術）	SD	四分位（25%）	四分位（50%）	四分位（75%）
認可保育所	93.1	59657.8	57731.0	640.9	761.0	911.8	283.7	525.4	937.5
幼稚園	112.7	71795.3	70248.8	637.1	985.1	1125.7	300.0	625.0	1250.0
認定こども園	132.6	85949.4	74300.5	648.4	778.1	778.0	288.5	476.2	970.6
その他施設	45.5	38448.3	37419.0	844.5	1146.2	771.7	500.0	1111.1	1578.9
小学校	322.7	498,000	—	1543.0	—	—	—	—	—
中学校	314.8	587,000	—	1865.0	—	—	—	—	—

(2) 蔵書数・予算に対する保育者の認識

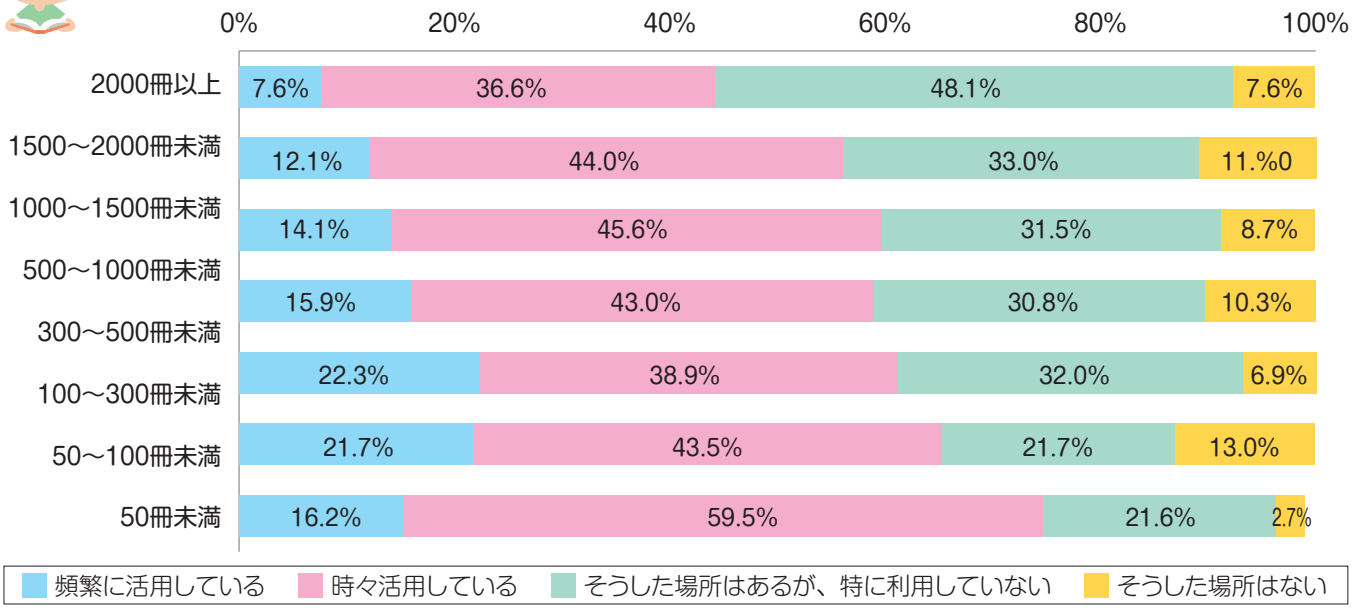
蔵書数が2000冊以上の場合、蔵書数が十分であると自信をもって回答している園が約半数に上った。反対に、100冊未満の施設では十分でないという回答が半数に上っていた。蔵書数が少ない施設ほど、絵本・本を借りることのできる近隣施設をより頻繁に活用していた。

「実際の蔵書数」と「蔵書数が十分であるかどうかに対する認識」との関連



※「蔵書数が十分であるかどうかに対する認識」＝
Q.「園における「絵本」の蔵書数は、十分だと思いますか」に対する回答

「実際の蔵書数」と「近隣地域の活用」との関連



※「近隣地域の活用」＝
Q.「園の近隣地域に「絵本」を借りる場所はあり、活用していますか」に対する回答

(3) 蔵書数・年間購入予算に関連する要因

認可保育所、幼稚園、認定こども園ともに「保護者」が園の絵本・本の購入に関わっている園では蔵書数が多くなる傾向がみられた。同様に、３施設とも絵本を借りることのできる近隣施設を活用していると回答した園ほど、絵本・本の年間購入予算が少ない傾向にあった。

各施設形態で蔵書数や年間購入予算と関連する要因を明らかにするために、
重回帰分析（ステップワイズ法）を用いた統計解析を行いました。
表は、それぞれの選択肢があてはまる場合に、平均して蔵書数や予算が何冊／何円増減するかを表しています。

認可保育所		
保護者から希望が出たときに購入	513	冊↑
近隣施設の活用	276	冊↓
絵本専門の業者から購入	223	冊↑
管理職から希望が出たときに購入	152	冊↑
遊具や備品等を扱う業者から購入	143	冊↓
書店に園関係者が出向いて購入	132	冊↑
設立年数（1 年歴史が長くなる毎に）	5	冊↑
園児数（一人増える毎に）	2	冊↑
幼稚園		
保護者が選択する	755	冊↑
園長・副園長が選択する	504	冊↑
その他の方・団体の寄贈	411	冊↓
絵本専門の業者から購入	319	冊↑
園児数（一人増える毎に）	4	冊↑
認定こども園		
保護者から希望が出たときに購入	2764	冊↑
保護者の費用負担	745	冊↓
保育者から希望が出たときに購入	660	冊↑
設立年数（1 年歴史が長くなる毎に）	18	冊↑

園の蔵書数の多寡と関連する要因

認可保育所と認定こども園では、「保護者から希望が出た時に購入する」と回答した施設はそうでない施設に比べて蔵書数が多い傾向にありました。幼稚園でも同じように、保護者が購入する絵本の選択に関わる園で蔵書数が多い傾向にありました。また、認定こども園では、蔵書数が少ない園では絵本購入にあたって保護者の費用負担がある傾向にありました。
これらの結果は、園の絵本・本環境にあたって保護者との協働が特に重要であることを示唆していると考えられます。

絵本・本の年間購入予算の多寡と関連する要因

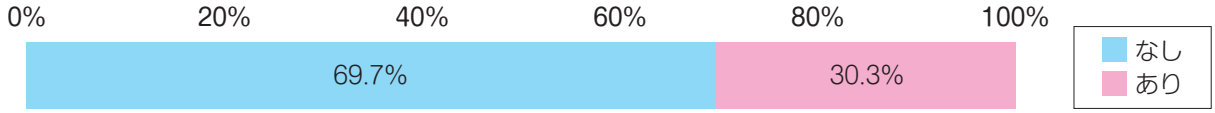
全ての施設形態で、絵本・本を借りることのできる近隣施設を活用していると回答した園はそうでない園に比べて年間の予算が少ない傾向がみられました。
新しい絵本・本を購入する予算が限られている保育・幼児教育施設では、近隣の施設（図書館など）が園の蔵書環境を構築するうえで非常に重要な役割を果たしていることがわかります。

認可保育所		
保護者が選択する	72,690	円↑
定期的に購入	22,588	円↑
保育者が選択する	16,062	円↓
近隣施設の活用	15,994	円↓
管理職から希望が出たときに購入	15,072	円↑
絵本専門の業者から購入	13,519	円↑
インターネット通販で購入	12,359	円↑
園児数（一人増える毎に）	160	円↑
幼稚園		
職員の寄贈	26,626	円↑
絵本専門の業者から購入	24,389	円↑
近隣施設の活用	23,507	円↓
保護者費用負担	17,247	円↑
設立年数（1 年歴史が長くなる毎に）	568	円↑
園児数（一人増える毎に）	200	円↑
認定こども園		
近隣施設の活用	40,152	円↓

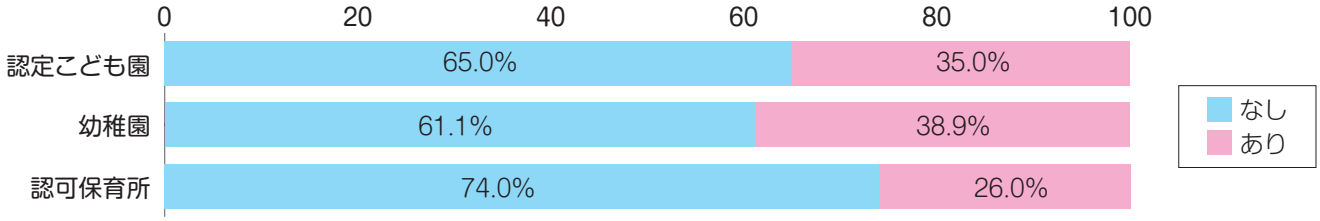
（4）絵本・本環境のための保護者の費用負担、自治体の補助金

園で子どもが使用する絵本・本の購入にあたって、保護者の費用負担がある園は幼稚園と認定こども園で４割弱、認可保育所で３割弱であった。絵本・本購入に際して自治体の補助金があると回答した園は幼稚園で23%で他の施設形態に比べて多い傾向にあった。

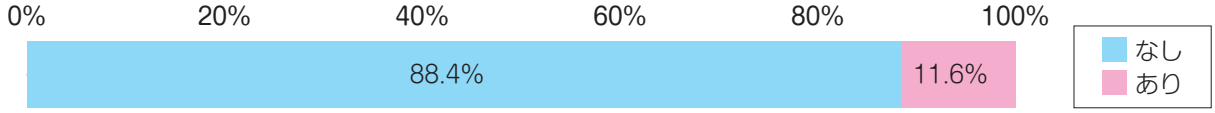
園でお子さんが使用する「絵本」の購入にあたって、保護者の負担はありますか。



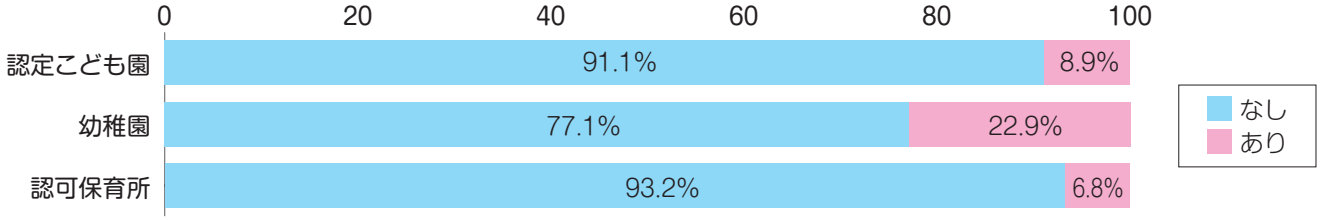
施設形態別：保護者の費用負担の有無の場合（有効回答のみ）



園でお子さんが使用する「絵本の購入にあたって、自治体の費用負担はありますか。



施設形態別：補助金の有無の場合（有効回答のみ）



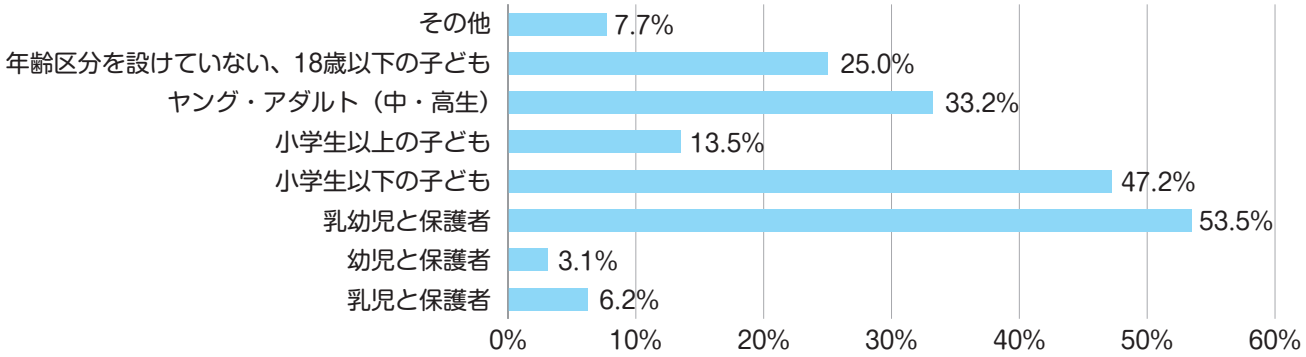
この調査を通じて、保育・幼児教育施設の絵本・本環境には施設ごとの格差があること、小・中学校と比較して蔵書数が少ないことが明らかになりました。蔵書数が他の園に比べて少ない園や、絵本・本を購入するための年間予算が少ない園の保育者ほど、蔵書数や予算が十分でないと考える傾向にありましたが、その一方で、蔵書数や予算が少ない園でもそれらが十分であると考える保育者は比較的多く、乳幼児期における絵本・本環境の重要性や子どもの読む権利について啓発していく必要性が示唆されました。
蔵書数や予算の多寡に関わる要因の分析では、園の絵本・本環境に対する保護者や近隣施設の重要性が示唆され、園関係者だけでなく、保護者や近隣施設もまた園の豊かな絵本・本環境を構築するうえで重要な役割を果たしていることが明らかになりました。ただし、自治体に園の絵本・本購入のための補助金があるとした園は少なかったため、今後絵本・本環境の量・質の保障と向上に向けてどのような取り組みが必要か、エコシステムの視点から検討を加えていく必要があると考えられます。

3 子どもの読書環境と公立図書館の役割に関する調査

(1) 子どものための区画・スペースと乳幼児向けスペースの設備・環境構成

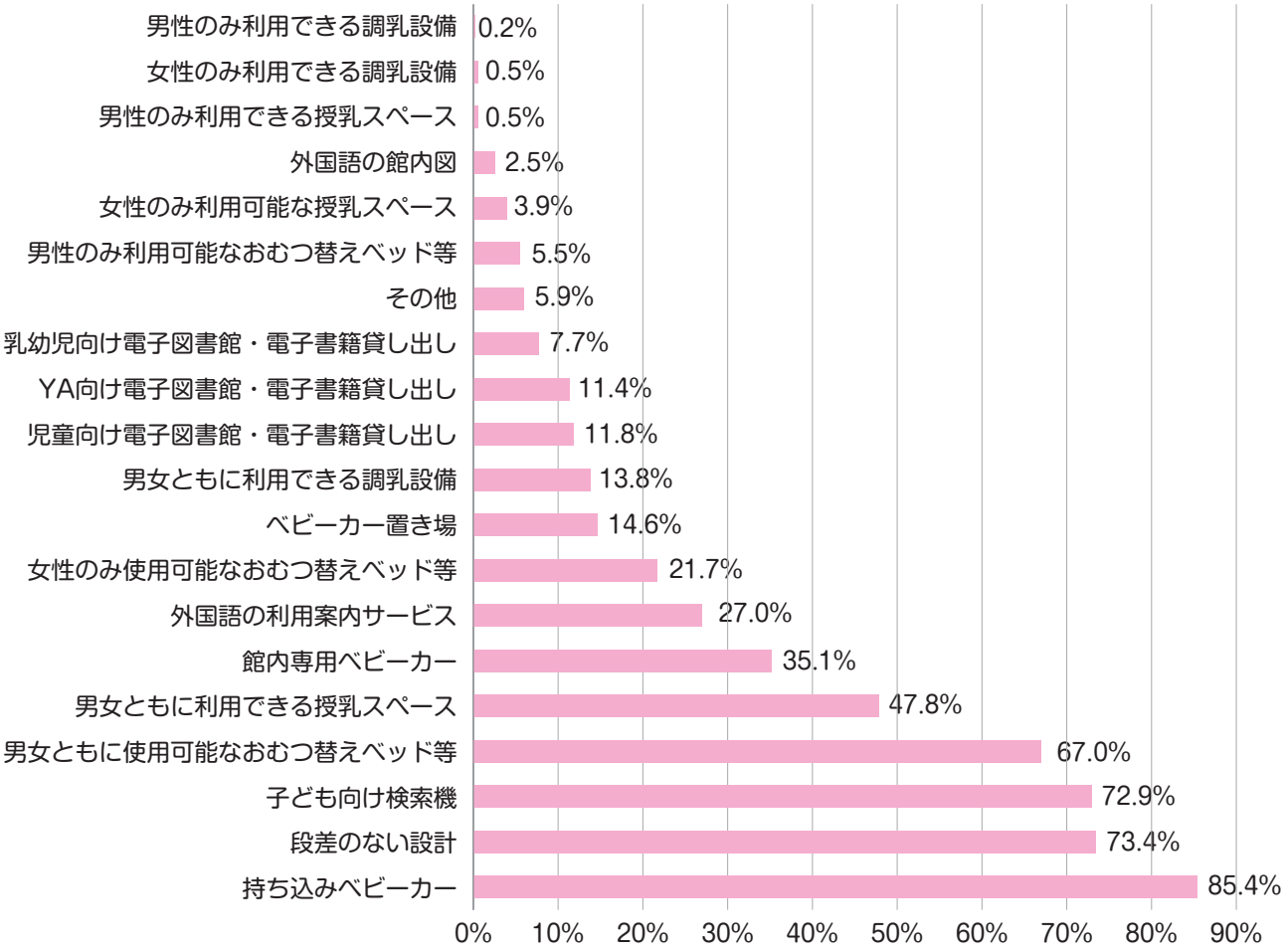
「乳幼児と保護者のためのスペース」を設けている図書館は半数以上で、乳児と幼児でそれぞれ異なるスペースを設けているところもあった。乳幼児と保護者が気軽に図書館に立ち寄ったり、利用したりしやすい設備やサービスを導入している図書館も多い一方で、ICT化や外国語対応については課題である可能性が示唆された。

子どものための区画・閲覧スペース



※特定の区画や座席を、特定の年齢の子どもや親子連れの優先利用区画や優先席としている場合も区画・閲覧スペースに含めていただくよう依頼した。

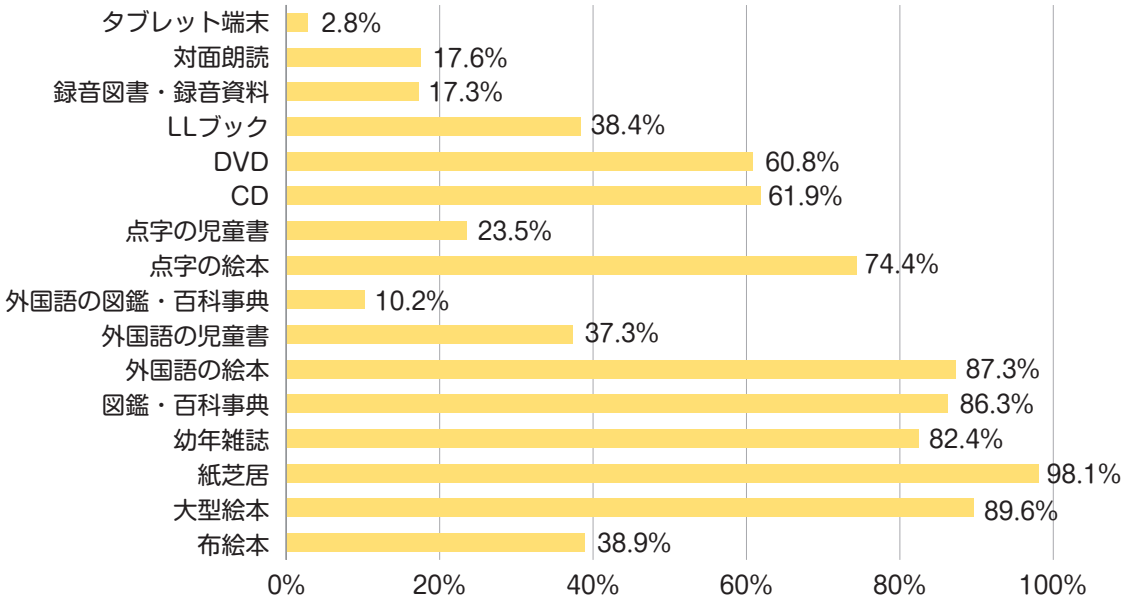
子どもと保護者のための設備やサービスの導入割合



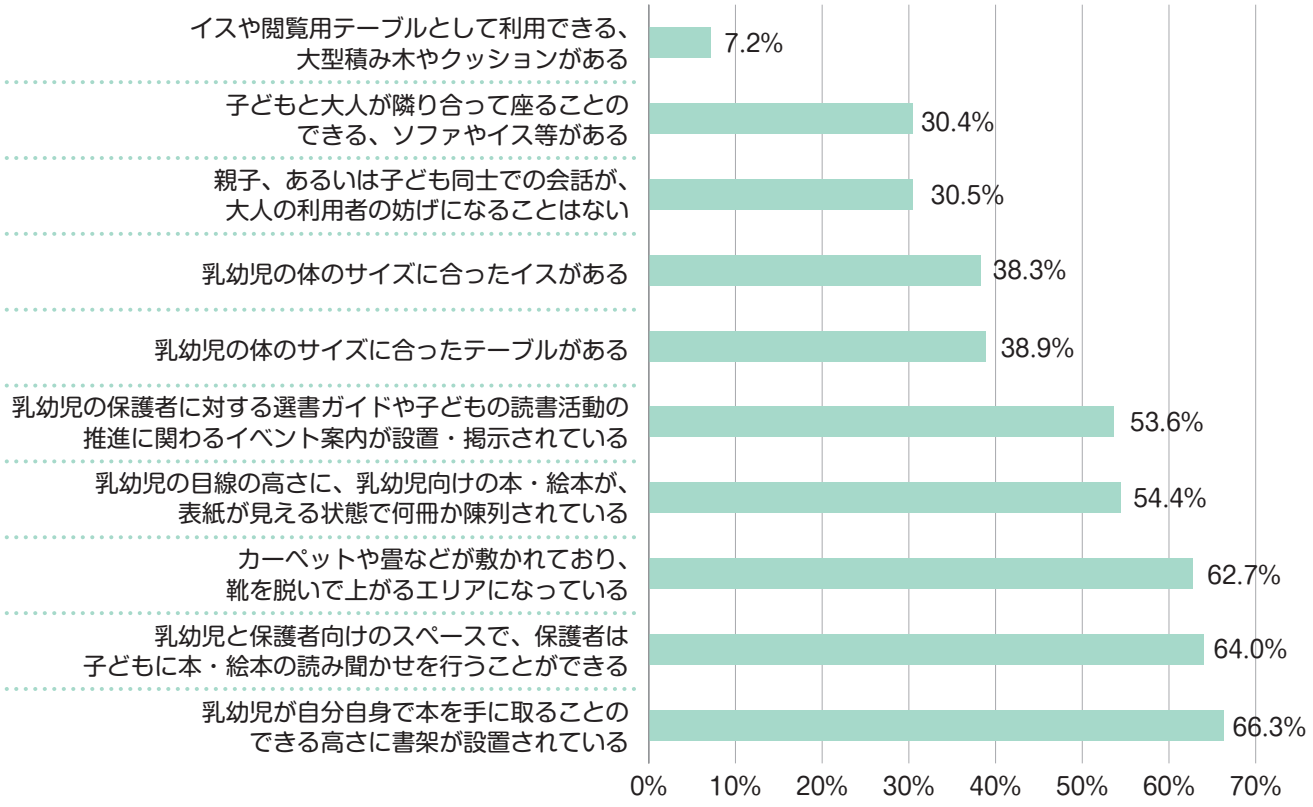
(2) 乳幼児とその保護者のための資料や優先区画・スペースの環境構成

紙芝居や大型絵本は大多数の図書館で利用できること、外国語の絵本や児童書、展示絵本などのバリアフリー対応も進んでいる。また、多くの図書館・図書室で乳幼児と保護者のためのスペースでは、子どもが自分自身で本を選び取ったり、絵本を親子で楽しんだりできる環境構成の工夫がなされている。

乳幼児とその保護者のための蔵書・物品、サービス



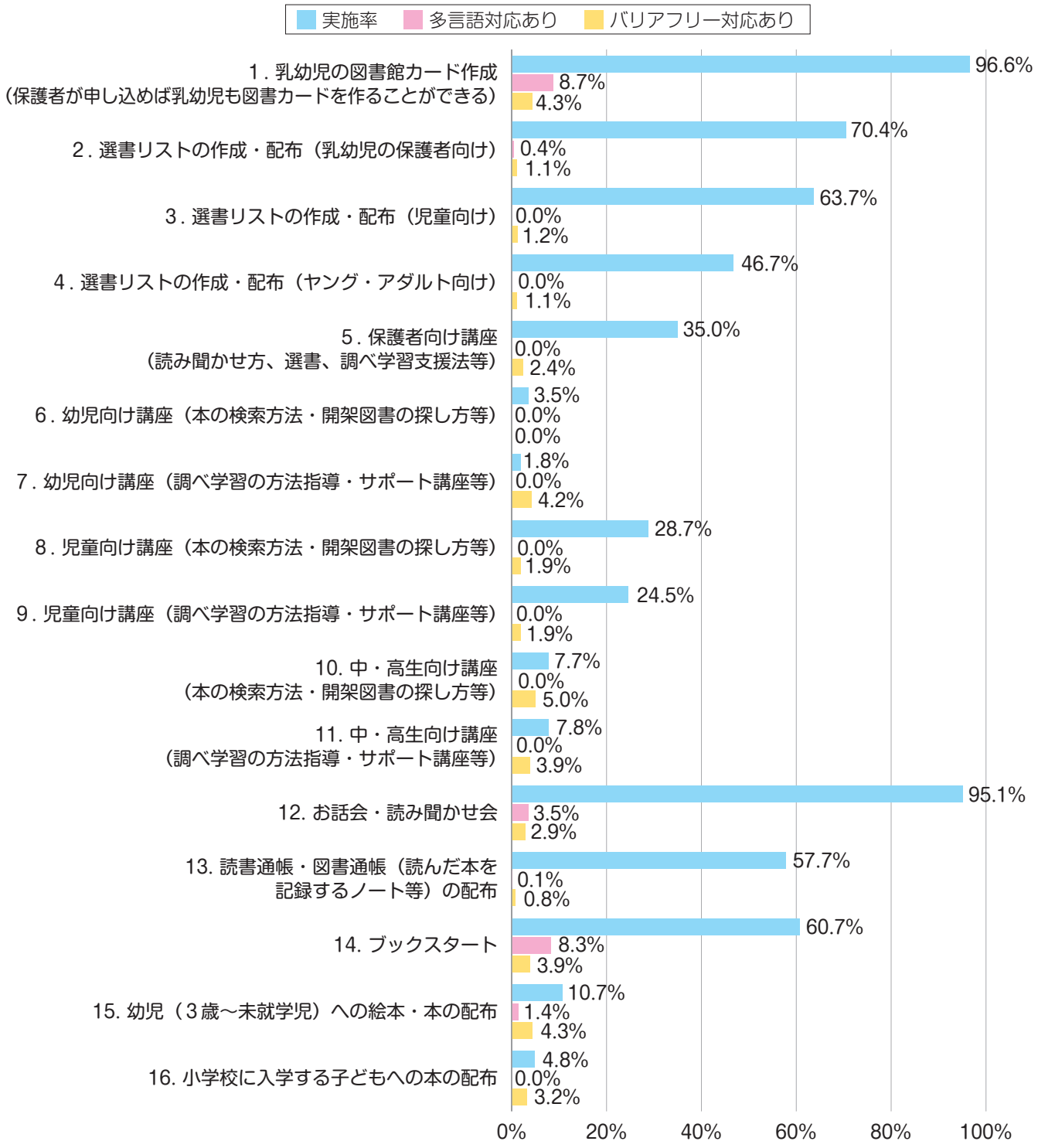
乳幼児とその保護者のためのスペースにおける環境構成



(3) 子どもの読書活動の推進に向けた取り組みの実施率

子どもの読書活動の推進に向けた取り組みのうち、最も実施率が高かったのは子どものための図書カードの作成であり、外国語対応やバリアフリー対応を行っている自治体のあり合いも他の項目に比べて多かった。また、お話会・読み聞かせ会は他の子ども向け講座に比べて実施率が高かった。

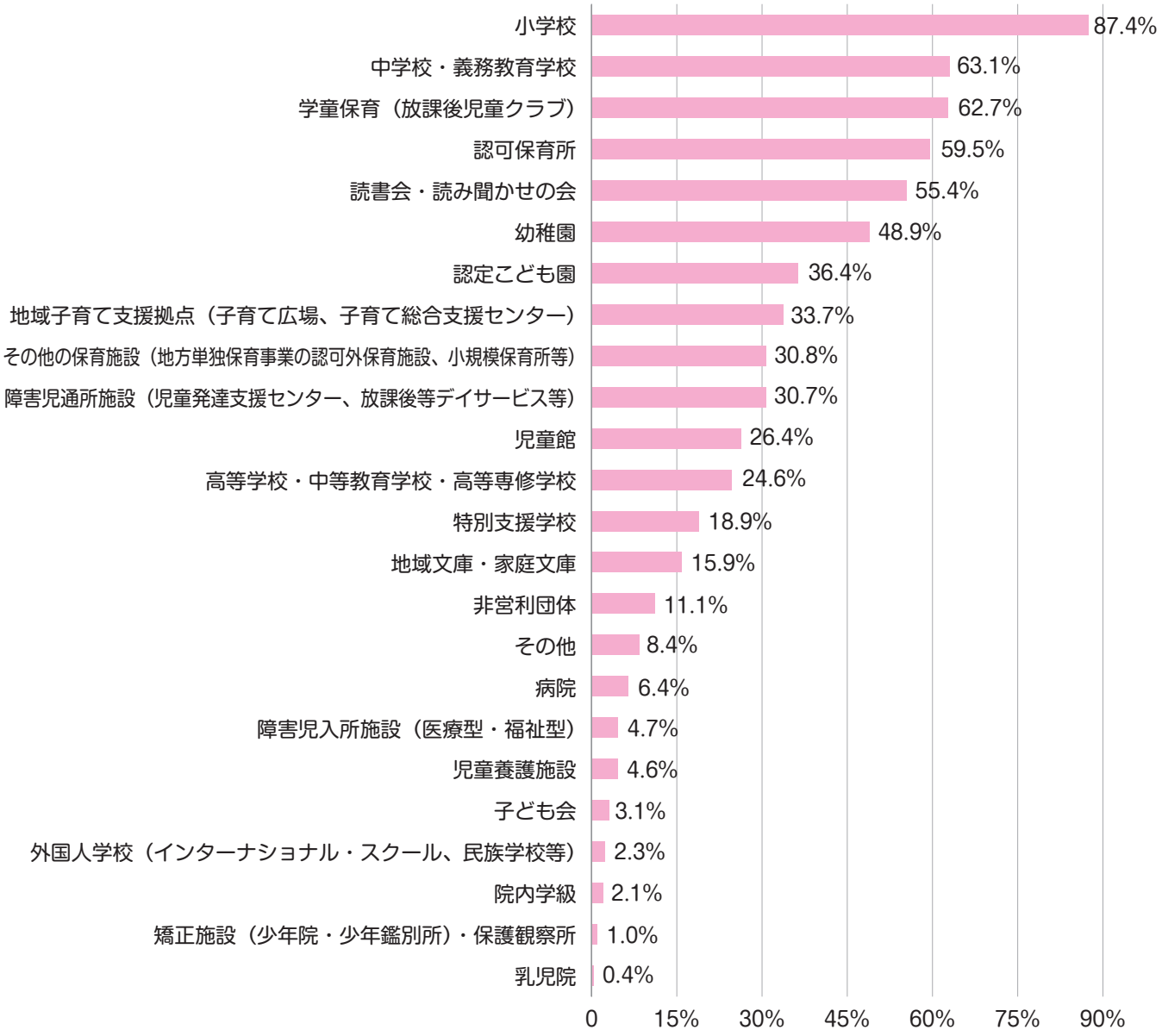
子どもの読書活動の推進に向けた取り組みの実施率と外国語対応、バリアフリー対応の状況



（4）公立図書館・図書室と子どもに関する地域の施設との連携

園で子どもが使用する絵本・本の購入にあたって、保護者の費用負担がある園は幼稚園と認定こども園で４割弱、認可保育所で３割弱であった。
絵本・本購入に際して自治体の補助金があると回答した園は幼稚園で23%で他の施設形態に比べて多い傾向にあった。

子どもに関わる地域の学校・施設との連携の実施状況（団体貸出の実施率）



この調査を通じて、全国の公立図書館・図書室が子どもとその保護者が来館・利用しやすいよう様々な取り組みを行っていること、子どもの読書活動の推進に向けて多様な活動を展開していること、子どもに関わる地域の諸施設との連携を進めていることが改めて明らかになった。一方で、特別なニーズをもつ子ども（母国語が日本語でない子どもや障害をもつ子ども、福祉施設を利用する子どもなど）への支援や関連施設との連携、ならびにICT化は今後の課題であると考えられる。

コメンタリー

保育・幼児教育施設、図書館、自治体の方々に調査結果をお読みいただき、3つの調査の中で特に注目すべき結果やその重要性、このプロジェクトに対する期待などについてコメントをいただきました。

保育の現場でよく議論されることは、「非認知能力を育むには」という課題です。自制心や協調性、社会性を育むためどうすればよいのか…。調査の中にもあるように、非認知能力とリテラシーの関連については、最も注目すべきことと考えます。幼児期に多くの絵本と触れる経験は、言葉を獲得していくだけでなく、物語の世界を体験しながらある意味「冒険」を楽しむことができます。その中で、驚きや発見、喜怒哀楽の感情を味わい、やがては実体験の中で経験値を高める基礎となるのかもしれません。読書と非認知能力とリテラシー。これは幼児期の子ども達にとって大きな循環とも言えることなのではないでしょうか。読書という経験から言葉を理解し、豊かな感情体験により他者への寄り添う力が育まれる。そのことが非認知能力を伸ばす。この循環は乳幼児期の子どもにとって読書好きの礎になるかもしれません。そんなことを少しだけ意識して、大人自身がコロナ禍の今、「読書」を楽しみ子ども達にその楽しさを伝えることができたら、大人も子どもも豊かな気持ちになり、精神的なゆとりを生み出してくれるのかもしれません。そんな環境がやがてくるアフターコロナの世界にあることを願って…。

幼保連携型認定こども園
平田村立ひらたこども園
保育教諭
桑原　真希

同志社大学免許資格課程センター教授・同志社大学大学院総合政策科学研究科教授
原田　隆史(図書館情報学)

こどもの絵本と読書環境に関して家庭，保育・幼児教育施設での実態と保護者の意識，さらに公共図書館の活動と今後の可能性について様々な角度から分析が行われている。全体的に見やすくまとめられており現状を把握するのに有意義であろう。調査内容の点では，特に保育・幼児教育施設の蔵書数や資料購入予算に与える要因の分析が興味深い。たとえば，近隣の施設の利用と資料購入予算との関わりが明確に示されている点は公共図書館の今後のサービス展開や，これら施設と図書館との協力体制などを検討する上でも有効な資料と思われる。また，従来から言われていることではあるが，図書館におけるバリアフリー対応が現時点で極めて低調であることを明確に示しているという点も多くの図書館関係者に見てほしいところである。ただし，本調査でまとめられた内容はあくまで基礎的なデータであり，今後どのように生かしていくことこそが極めて重要であるともいえる。現状把握の段階を越えて，近未来的にどのような展開・連携の方策を工夫することができるのか，多くの人々の知恵を結集することが求められる。本プロジェクトには次の段階として実現可能な提言を，できれば劇的な展開を主導する役割を担っていただくことを期待したい。

保護者調査の結果を拝見させていただき、幼児がデジタルデバイスを使用する時間に対して、絵本や本を読む時間が少なく、幼児の生活や遊びの中にもデジタル化が急速に進んでいることを実感しました。紙とデジタルそれぞれにメリットやデメリットがあると思いますが、幼児がうまく選択し、利用できるように大人が環境を整えていくことが必要だと思います。特に保護者が絵本や本を選ぶ際に、それは紙とデジタルのどちらが有効か、などの情報が得られるような研究が進めばよいと思います。

次に、保護者のストレスについての結果にあるように、保護者が子どもに対して読み聞かせをする際には、ある程度の余裕が必要であると感じました。その中でも、３日以上子どもと一緒に読書をする家庭が半数あるなど、保護者なりに短くても子どもと一緒に読書をする時間を作ろうと努力をしているように感じます。子育て家庭への支援の充実が、子どもの読書時間にもかかわってくるように考えます。単なる読書時間の増加だけでなく、親子の精神的な安定も図られるように、行政や保育・幼児教育施設などがどのように支援していくことが有効か、明らかになることを期待しています。

金沢市
いいね金沢

金沢市こども未来局
幼児教育センター
幼児教育係　係長
跡地　慎也

結果の解説・読み解き方

発達心理学や保育学の専門家から、データの読み解き方や学術的に特に意義のあるデータについて解説していただきました。

本調査において、「読書」のみが非認知能力とリテラシー双方にポジティブな影響があることが明らかになったことは重要な点です。一方、家庭では絵本や本との触れ合いよりもスクリーンタイムが圧倒的に多い実態が明らかにされています。だからこそ、乳幼児教育・保育施設の役割が大きいのです。園で多様な絵本に出会い、絵本が好きになることは、家庭での絵本習慣につながる可能性があります。しかし、本調査では、園による蔵書数のバラつき、小中学校に比べて蔵書が少ないこと、少ない予算や蔵書数でも十分との保育者の認識があるといった課題も明らかにされたのです。保育の場において、絵本環境が子どもの豊かな生活や発達の観点からいかに重要であるかといった認識がさらに広がることの必要性が示唆されました。私は「絵本を保育の真ん中に」と述べていますが、保育のあり方次第で子どもは絵本が大好きになり、絵本を通して信頼関係や多様な文化的世界への広がりにつながるのです。そのような意味で、園での絵本環境の量的充実に加え、質的な充実の必要性の示唆が得られたことは、とても重要なことだと考えます。

大豆生田　啓　友　玉川大学教育学部教授　乳幼児教育学・保育学

今回の調査でもっとも驚いたのは、人生のなかでいちばん絵本と仲良しであるはずの年少から年長さんの1日の絵本時間が短くなっていたことでした。休日・平日ともに10分以内が過半数を占め、0分のお子さんも1割以上です。私たちが2006～2008年に実施したメディア調査では、同年齢で平均約26分～29分でしたので、明らかに減ったのではないかと感じます。おとなと一緒に楽しむ絵本は、子どもの言葉や社会性の発達にとって良い影響を及ぼすものであることは、多くの研究から明らかにされてきています。一方で長くなっているスクリーンタイムですが、かなやカナの読みに関するリテラシーとは負の関係があり、言葉の発達に必要な絵本時間がスクリーンタイムに圧迫されている現状がうかがわれます。テレビもスマホもタブレットも、良質な番組やアプリをおとなと一緒にお話ししながら楽しむことができれば、絵本と同じように言葉の発達を促す効果を持つのですが、残念ながら、そのような使い方をしているご家庭がまだ少ないのかもしれません。

親子に親切な、すてきな図書館がたくさんあるという結果は、とてもうれしいものでした。国や自治体には、子どもたちの読書環境を豊かにするためにもっともっと投資してほしいと思います。今回の調査がそのきっかけとなることを祈っています。

菅原　ますみ　白百合女子大学人間総合学部発達心理学科・教授　発達心理学・発達精神病理学

新型コロナを契機に電子メデイアへの意識が大きく変化する時期に、エコシステムの視点から３層の環境を対象に実施した全国調査結果は、３点のことを示しています。第１は、乳幼児期の絵本・本経験が活動的・創造的遊び経験と共に、子どもの非認知能力に影響をするという発達的重要性です。しかし第２に、個々の子どもが置かれている家庭や園における環境に格差がある実態も明らかになりました。しかしそのような格差はあっても第３に、家庭・園・図書館等地域の大人が連携協力交流する仕組みづくりにより、互恵的相補的により豊かな環境が形成できる可能性も示されたことです。園が家庭に貸し出しを行い、図書館は蔵書量が少ない園に団体貸し出しを行うなどの絵本・本という「もの」の物的循環があり、保護者が絵本・本購入の選択に要望を出すなどの参画や図書館が多様な子どもたちに向けた活動を家庭や園に向け実施するなどの対話の輪による出来事の連鎖によって、絵本･本は子どもを育む地域資源となります。エコシステムとサイクルが地域の読書コミュニテイを生みだす可能性と希望にむけて本冊子は一つの羅針盤となるでしょう。時間経過と共にこれからにどのように変化するかを追究し続けていってほしいと思います。

秋田　喜代美　（学習院大学教授、東京大学名誉教授）発達心理学・保育学

謝辞

一連の調査にご協力くださいました、保護者の皆様、保育・幼児教育施設の関係者の皆様、そして全国の公立図書館関係者の皆様には深く御礼申し上げます。

また、調査実施にあたりヒアリングにご協力くださいました公益財団法人日本学校図書館協議会の皆様や、学会やイベント等で調査結果に対して有益なコメントをくださいました皆様にも感謝申し上げます。

調査実施者・協力者

【調査1】

佐藤賢輔（東京大学Cedep）
浜名真以（洗足こども短期大学／東京大学Cedep）
廣戸健吾（東京大学大学院／東京大学Cedep）

【調査2】

高橋翠（東京大学Cedep）・野澤祥子（東京大学Cedep）
菅井洋子（川村学園女子大学）・佐久間路子（白梅学園大学）
仲本美央（白梅学園大学）・唐音啓（東京大学大学院）
秋田喜代美（学習院大学／東京大学大学院）
一部解析協力：北條大樹（東京大学大学院／日本学術振興会）
発送・集計協力：村井咲月・福地綾音・菅原まり

【調査3】

高橋翠（東京大学Cedep）・野澤祥子（東京大学Cedep）
菅井洋子（川村学園女子大学）・秋田喜代美（学習院大学／東京大学大学院）
眞田英弥（東京大学大学院・東京大学Cedep）・出水雅子（東京大学Cedep）
松枝真理子（東京大学Cedep）・内田麻里奈（東京大学Cedep）
発送・集計協力：松浦和代・宮澤那緒・向出歩穂・藤井千尋・松枝華子
藤井達也・高橋葉子

【株式会社ポプラ社】

池田紀子／上野萌／齋木小太郎／花立健／松田恭子／松本麻衣子／横田亮介

本プロジェクト（子どもと絵本・本に関する研究）について

■デジタルメディアの普及が進み、乳幼児期にスマートフォンやタブレット端末に触れる子どもが増える中で、一方では子どもと本の出会いの場であった地域の書店が減っており、子どもたちが絵本や本に接する機会が減っていくことへの強い危機感が背景にあります。

■ポプラ社では「ひとりでも多くの子どもたちを本好きにしたい」という想いから、今こそ‘本’の価値を科学的研究の見地から見直すべきと考え、乳幼児や絵本に関する知見が豊かで、産官学との協創探究を目指す東京大学Cedepと、この共同研究を開始することとなりました。

■本研究では、子どもの発育発達プロセスにおける絵本・本の固有性や、認知能力・非認知能力の発達への寄与の可能性、保育園・幼稚園での絵本をとりまく環境などを、科学的アプローチによって明らかにしていくことで、デジタルメディア時代の絵本・本の新たな価値を発見し、その研究成果を広く社会に向けて発信することで、未来の子どもたちにより豊かな読書環境を提供することを目指してまいります。

https://www.poplar.co.jp/topics/48312.html

本リーフレットのダウンロードはこちら

「リーフレットPDF版のURL」はウェブサイト等にご転載いただけます。

なお、リーフレットPDF版のURLを掲載される際には、出典を明記していただいた上で、事前にcedep@p.u-tokyo.ac.jpに掲載先情報をご一報ください。どうぞよろしくお願いいたします。

http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects_ongoing/poplar/

制作・発行 東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター（Cedep） 印刷 ヨシミ工産株式会社 発行日（第4版 2022年2月28日）

本リーフレットのコンテンツ（内容）に関する著作権は発達保育実践政策学センターに、デザインに関する著作権は(株)ヨシミ工産に帰属します。